

一 次の文章を読み、後の問いに答えよ。（50点）

このエリアには主に3種類の植物が生えているが、孤独相は3種類中一種類の植物にだけ潜んでいた。ところが、群生相はこだわりなくどの植物にも群がっている。

近寄って観察しようとするとバツタは逃げるが、㊦シツヨウにストーキングを繰り返すうちに、大きく分けて(1)2通りの逃げ方があることに気づいた。幼虫が群がっている植物に向かって歩いていくと、彼らは跳びはねて外に逃げるか、その植物の中に逃げ込むか、どちらかなのだ。傾向として、群がっている植物が小さいと逃げ出し、大きいと植物の中に逃げ込む。後者の場合、植物を㊧ボウギョシエルターとして利用しているようだ。シエルターの質に応じて逃げ方を変えるのは理に適っている。立て籠もる城が心許ないときは、城を見捨てて速やかに逃げ去り、一方、城が㊨ケンゴなときは籠城する、戦国時代の戦いに通ずるものがある。傾向が見えてくると仮説がひらめく。

「群生相の幼虫は、群がっている植物の大きさに応じて逃げ方を変える」

バツタを大量に㊩ホカクしたい私にとつて、彼らに逃げられるのが悩みの種だ。今ここで彼らの逃げ方に関する情報を手に入れることができれば、今後の採集㊪コウリツは飛躍的に向上するだろう。よし決めた。バツタの逃げ方を研究しよう。こんな大量のバツタを実験室で飼育できるわけではない。ここでしか研究できないという地の利を活かそう。設営したテントに戻り、コックが入れたお茶をすりながら研究計画のデザインをはじめめる。

必要なデータは三つ。まずは、①植物上の群れの個体数。仲間が多ければ強気になって逃げなくなるかもしれないので、あらかじめバツタが大体何匹いるかチェックしておく。次は、②逃げ方。植物から逃げるか、留まるか。そして、③シエルターの質の判断基準として、群れが留まっている植物の種類と大きさ。これらのデータを収集できればバツタの逃げ方のパターンを解明できる。

逃げ方を観察する方法だが、実験室だったら、ロボットかなんかで同じスピードでバツタに近づくとこのような精密なアプローチが望ましい。だが、ここは砂漠なので人力で勝負だ。

科学として認められるのは、「他の研究者が同じように実験しても同じ結果が再現できるもの」だけだ。つまり、いつか誰かが私の観察を確認しようとしたときのことを考え、誰にでもできる手法で統一しておく必要がある。また、論文は英語で執筆しなければならず、複雑なことをすると英語での表現が難しくなる。そのため、㊫シンプルな方法を採用したほうが、後々の自分のためにもなる。

そこで、バツタにアプローチする際の服装にもこだわることにした。ストーキング役の学生には全身白装束になつてもらい、私の指示で歩いてもらうことにした。私は観察役に徹する。

ターゲットを見つけたら、まずは群れの大きさを小さなものから大きいものまで5段階に分けて記録し、サツと手を振ると、バツタが群がっている植物に学生がゆつくり歩み寄る。私はバツタの逃げ方を観察し、その後でその植物の縦横高さを巻き尺で測定する。これをひたすら繰り返せばよい。

大量のバツタがいるおかげで、地平線の彼方まで実験し放題だ。ファールが活躍していた時代と同じように、特別な機械に頼らずとも工夫次第で知りたいと思ったことが知れるのだ。

しばらく観察を続けると、感覚的にだが、仮説を支持するデータが採れつつあるようだ。しかしながら思い込みは厳禁。あくまでも客観的に実験を進めることにする。

- (一) ㉗㉘のカタカナを漢字に直せ。
- (二) 傍線部(1)の違いとその理由について、本文に即して八〇字以内で説明せよ。
- (三) 傍線部(2)の内容を八〇字以内で説明せよ。

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。(50点)

自然科学を中心とした⑧セイオウ近代の学問が客観性を追求したとき、個別経験の生々しさは脇に抑えられた。このとき整合的な論理が学問の言語として残り、(A)いびつで一回限りの語りは排除されていくことになる。だからと言ってたどたどしい語りの背景にある、生きている実感が無価値なわけではない。あいまいでぎくしゃくした「経験の生々しさ」の復権のために、まずそれを伝える語りを大事にしたい。

本論に入る前に、「経験」について、あらかじめ簡単に定義しておきたい。私たちは家族や友人に始まり日々込み入った対人関係のなかで試行錯誤している。学校制度や社会制度、さまざまな規則とのせめぎあいのなかでやりくりしている。さらに私たちの思考や行動は、文化的背景や経済状況、世代を超えた歴史的な背景も影響している。このようなバックグラウンドを踏まえた上で、私たちが日々感じることで、そのつどの状況への応答や、誰かへの応答、さらにそのなかでの行動、このようなものの⑨ソウタイを私は「経験」と呼んでいる。(中略)

私が特に大事にしているのは、個人の「経験」を語りだす⑩ソツキョウの「語り」である。それは聞き手に、生き生きとしたものとして迫ってくる。生き生きとした経験は、ソツキョウの語りの生々しさへと受け継がれる。生き生きとした経験こそが、客観性と数値によつて失われたものだ。それゆえ語りのなかに保存された生き生きとした経験をキャッチする方法を探ることは、科学において失われてきたものを取り戻す試みである。

私は長年にわたつて、看護師や子育て支援の対人⑪エンジョ職、そしてヤングケアラーや精神障害の当事者、ろう者(耳が聞こえない人)やアイヌの出自を持つ人など社会的な困難の当事者にインタビューをお願いしてきた。(B)インタビューでは質問を準備せずに二時間ほど気の向くままにあちこち話題が飛ぶのに任せて語っていただく。インタビューの語りは、口癖のみならず言い間違いやオノマトペなどを再現する忠実な逐語録をもとにして(複数の語りを混ぜることなく)一人ひとりについて分析する。一人ひとりの語りのディテールを尊重しながら多様な話題間の連関を考える。これによつて、語り手が経験してきた困難、実践のスタイル、生き方のスタイル、そしてその背景にある社会状況の構造を、その語り手の視点に立つて明らかにしようとした。この分析から明らかになる経験の構造には、(C)客観的な数値が与える知識とは異なる意味がある。

個別の人生や個別の出来事を一人称の視点から分析するとき、外から見た客観的な指標では見えてこない具体的な像が生まれる。客観的なデータの背景に横たわる血肉の通った生の姿を理解できるように、読み手をなにかの行為へ向けて触発する。

また、語りを大事に扱うことは、語る人の経験を大切に扱うことである。一人ひとりの人生はまったく異なる。これは、「個性的」といった話ではなく、どうしたつて対人関係や環境、行動は一人ひとり異なるという意味だ。人と異なる部分はしばしば偶然の出来事、とりわけ困難や苦痛にかかわる。生

まれ育った環境は人によって異なる。貧困や差別もあるし、障害や病などの身体的な条件も異なる。そのため、個性的であろうがなからうが、人生は㉔イヤオウなく一人ひとり異なるものになる。苦労や苦痛は取り替えが利かない偶然性と個別性において人を襲う。語りはまさにこれらを映し出す。

一人ひとりの苦労の経験は、科学的な客観性に回収することができない。だから個別の苦労をそのまま尊重し描き出すことには意味がある。そしてこのような苦労は、ソッキョウ的な語りのなかにこそ背景の文脈や対人関係の布置とともに保存される。それゆえに語りをそのまま大切に扱うことが、語る人の経験を大切にすることになる。

社会科学の論文のみならず新聞や雑誌がインタビューを用いるときには、要約し、わかりやすく書き直すことがほとんどである。しかし、私はあえて「語られた言葉をそのまま記録する」ことの重要性を主張していきたい。口癖の使い方や人称代名詞のゆらぎ、言い間違いのなかに、経験のひだと複雑さが表現されるからだ。語りのディテールを尊重しながら多様な出来事のあいだのつながりを考えることで、本人も気づいていない経験の隠れた意味を浮かび上がらせることもできる。

村上靖彦(二〇二三)『客観性の落とし穴』筑摩書房

- (一) ㉔㉕のカタカナを漢字に直せ。
- (二) 傍線部(A)「いびつで一回限りの語り」と対立する概念を文章中から一〇字以内で抜き出せ。
- (三) 傍線部(B)にあるように、筆者がインタビューにおいて質問を準備しないのはなぜか。理由を本文に即して二〇字以内で説明せよ。
- (四) 傍線部(C)「客観的な数値が与える知識とは異なる意味」とはどのようなことか。本文に即して六〇字以内で説明せよ。
- (五) 本文における筆者の主張を八〇字以内で説明せよ。